

## 第二一回 丸山眞男文庫記念講演会

# 世界現代史への視座

## 丸山眞男が生きた時代を中心に

木 畑 洋 一

第二一回丸山眞男文庫記念講演会は、講師に東京大学・成城大学名誉教授の木畑洋一先生をお招きいたしました。木畑先生はイギリス帝  
国史、国際関係史、国際関係論を専攻され、主な著書として『帝国  
のたそがれ・冷戦下のイギリスとアジア』（東京大学出版会、一九九六  
年、大平正芳記念賞受賞）、『第二次世界大戦・現代世界への転換点』  
（吉川弘文館、二〇〇一年）、『イギリス帝国と帝国主義・比較と関係  
の視座』（有志舎、二〇〇八年）、『二〇世紀の歴史』（岩波新書、二〇  
一四年）などを出版なされています。

コロナ禍の中、ご講演くださいました木畑洋一先生に深く感謝申し  
上げます。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文

今日のお話は「世界現代史への視座」ということで、「丸山眞男が生  
きた時代を中心に」というサブタイトルをつけております。私自身が  
大学生だったとき丸山先生はまだ東大に勤めていらしたのですけれど  
も、法学部に進まずに駒場の教養学部というところに進んだために、  
結局先生の講義は聞かずに済みました。その後もあまりよい読者とい  
うわけではなく、切れ切れにしか丸山先生のお仕事には接しておりま  
せん。実際に丸山先生のお話を聞いたのは一九七五年にイギリスにお  
いでです。オックスフォードのセント・アントニーズというカレッジ  
に丸山先生がみえていて話をされたのを、私は当時いたロンドンから  
聞きに行きました。したがって、丸山先生の名前を冠した場でお話を  
する資格は私にはないのですけれども、思い切って丸山先生の議論に  
も若干触れながらお話をしてみたいと思います。なおこれから後は  
「丸山氏」と呼ばせていただきますのでよろしくお願いいたします。

今日の話はお配りしてあるレジュメに従ってやりますが、若干パ  
ワーポイントで地図や写真をご覧に入れたと思います。

## 一 丸山眞男が生きた時代

### (1) 丸山眞男の生涯

丸山氏が生きた時代を中心という副題をつけましたが、その時代  
の始まり、つまり丸山氏が生まれた年は一九一四年です。三月に生ま  
れています。その七月には第一次世界大戦が勃発しました。亡くなっ  
たのは一九九六年です。資本主義陣営と社会主義陣営、米ソ両陣営の  
間の対立だった冷戦が終わったといわれるのが一九八〇年代末から九  
〇年代初めにかけてですが、その直後といってよいときです。それが  
まさに丸山氏が生きた時代なのです。

### (2) E・J・ホブズボームと「短い二〇世紀」論

この時代は、ちょうど「短い二〇世紀」と呼ばれる時期に重なりま  
す。ホブズボームというイギリスの歴史家でしたが、彼は一九一  
七年、丸山氏よりはちょっと後に生まれ、かなり長生きをされて二〇  
一二年に亡くなりました。そのホブズボームが「短い二〇世紀」とい  
うことを議論しました。二〇世紀というと、暦でいえば一九〇一年か  
ら二〇〇〇年までですけども、一つの時代としてのまとまりとして  
は一九一四年から一九九〇年代の初めぐらいまでで、それが「短い二

〇世紀」だとホブズボームは言うのです。第一次世界大戦があつて、  
彼が生まれた一九一七年にはロシア革命という非常に大きな変動が生  
じ、ロシア革命で社会主義の国家が生まれてきました。それが問題に  
なったのが冷戦期であつて、その冷戦が終わったところで「短い二〇  
世紀」は終わったのだという議論をホブズボームは展開したわけです。

ホブズボームに関しては非常に詳しい伝記があつて、それを私は仲  
間と翻訳して出しましたけれども(リチャード・J・エヴァンス(木  
畑洋一監訳)『エリック・ホブズボーム 歴史の中の人生』上・下、岩  
波書店、二〇二一年)、この「短い二〇世紀」を生き抜いた人だけといえ  
ます。彼はこの時代の変化に直接立ち会つてもいました。たとえば彼  
は、ヒトラーがドイツで政権を掌握したときのベルリンにいましたし、  
それから一九三六年にフランスで人民戦線という形で社会党や共産党  
が手を組む大きな変化があつたのですが、その人民戦線ができるとき  
に彼はパリにいたのです。

### (3) 「長い二〇世紀」論

この「短い二〇世紀」という議論は非常に大きな影響力を持ちまし  
た。しかし、それに対して私は、ちょっと違うのではないかというこ  
とを考えて、「長い二〇世紀」ということを議論したことがあります(木  
畑洋一『二〇世紀の歴史』岩波新書、二〇一四年)。ホブズボームの「短  
い二〇世紀」では、第一次世界大戦、それからそこで生じたロシア革  
命が非常に大きな変化の源、画期とされています。それはたしかにそ

うなのです。ただ、世界全体を見た場合にどうなのか。つまり、ヨーロッパやロシアにおいては、それは大きな変化かもしれないけれど、アフリカを見たらどうなのか。あるいはアジアを見たらどうなのかというところ、どうもそう言えないのではないか。つまりホブズボームの「短い二〇世紀」という議論は、ヨーロッパ中心の一つの見方からする議論ではなからうかということを考えて、提示してみたのが「長い二〇世紀」という議論です。

「長い二〇世紀」というのは、暦の上でいえば一八七〇年代ぐらいからはじまって、冷戦が終わるのと同じぐらいのところまで終わります。

「短い二〇世紀」の場合には社会主義の誕生とか、それがどのような経過をたどったのかということが一番の問題になるわけですが、私が「長い二〇世紀」ということで一番問題にしたのは、世界が一方では支配をする側と、他方で支配をされる側、つまりこれは植民地とか保護国という地域になります。この二つに大きく分かれていったという問題です。世界の非常に広範な部分が植民地化される時期をこの「長い二〇世紀」の始まりにして、そこから世界が脱却する経過を考えていく。それが二〇世紀を見るとき軸になるのではないかということを考えてのです。その点を今日はお話ししてみたいと思います。

#### (4) 本報告：「長い二〇世紀」論から世界(近)現代史への視座を検討

今日の報告は、このような「長い二〇世紀」という議論から世界の

近現代史をどう見るかということをめぐるものになりますが、その際に丸山氏がこのような世界の変化についてどのようなことを語られていたのかということにも注意をしてみたいと思います。ただ国際関係の変化というものについての考えは、丸山氏の議論のなかではまった形ではなかなか捉え難いものがあります。断片的な議論が多いのですが、私が気づいた限りで拾い上げてみたいと思います。

### 二 帝国主義世界体制(帝国世界)の成立期：一八七〇年代～一九一四年

#### (1) 帝国世界の形成

「長い二〇世紀」は、帝国主義世界体制——略して帝国世界と呼びますが——が成立していったことではじまります。帝国世界を、地図でお見せします。ここで色が塗られている部分が何らかの形で帝国に關わるところです。帝国を支配した国と支配された地域が同じ色で塗られているという地図です。世界の非常に多くの部分が塗られています。それから、白く残っているところもあります。中国ですとか、あるいは南米あたりなのですが、しかしその多くも、植民地に完全になっではないもののそれに準ずるような形の地域だったのです。この地図ではどこが支配をして、どこが支配をされてという区分はされておりませんが、とにかくこのような形で世界の姿ができていきましました。これが「長い二〇世紀」の初めなのです。

この帝国世界は、一八七〇年代ぐらいから二〇世紀の初めぐらいに



帝国主義世界体制下の世界 (Putzger, *Historischer Weltatlas*)

かけてできあがっていった、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて変わりはじめます。第一次世界大戦というのは、ヨーロッパにとってはかなり決定的な変化が出てきた戦争かもしれないけれども、帝国世界というものを見れば、その基本的な構造、仕組みはそれで変わることもなく続いていきました。それが第二次世界大戦後になって本格的に崩れて、解体していったわけです。さらに最終的に冷戦が終わったと言われる時期、一九八〇年代の末から一九九〇年代初めぐらいに、とりあえずその解体のプロセスは終わります。とりあえずの終わりというときに一つ問題となるのが、ソ連が解体すること、それからソ連が影響力をもっていた東欧の社会主義圏が解体することです。「短い二〇世紀」の議論で言えば、社会主義国家が崩壊する、あるいは社会主義圏が解体することなのですが、私の議論で言うと、帝国世界的な構造がまだ残っていたところで——ソ連自体にも、それからソ連と東欧の国々との関係にもそれはいえます——、そのような関係が崩壊、解体するという位置づけになります。

こうしたプロセスをこれからお話ししたいと思います。ただ、非常に長い期間を取り上げますので、それぞれの時期について、詳しく何がどう起こったかということをお話しする余裕はありません。それぞれの時期について、どのようなことが私のような見方からいうと問題になるのか、重要だと思われるのかということをお話ししたいと思います。当然のことながら、網羅的な議論ということではございません。私のような見方からすれば世界現代史はどう見えるかということをお

話しするわけです。

## (2) 帝国世界の様相

まず帝国世界の形成期です。これは一八七〇年代ぐらいから二〇世紀の初めにかけての帝国主義の時代と言われる時期なのですが、世界の多くの地域で植民地化が進展していきます。先の地図でご覧になったように、アフリカなどはほとんど塗りつぶされるといふことになるわけです。それまではアフリカの沿岸部、海に近いところなどにはヨーロッパの力が入り込んでいたことが、内陸はそうではなく、ほんの少し前ですと内陸は真っ白ということだったわけです。それがこのような形で色分けをされるようになった、植民地にされていったということですが、アフリカの場合が一番そのような変化が激しいわけですが、ほかにも太平洋地域もそうですし、アジアでも植民地化が進んでいきます。

こうして植民地化される側と植民地を支配する側に、世界は大きく二つに分かれることとなります。植民地を保有する国の側では、それまでも植民地を拓けていたイギリスやフランスなどに加えて、たとえばヨーロッパの小国であるベルギーが、アフリカの中部の非常に広大な地域であるコンゴを支配下に収めました。ただ、ベルギー国王がコンゴを自分の私有地するというちょっと変わった形でありますけれども、いずれにせよ植民地化をしていったわけです。さらには暦の上での一九世紀の末から二〇世紀の初めにかけて、アメリカ合衆国、さ

らに日本も支配する国の側に加わるということになります。

このような帝国世界の様相をまとめて言えば、繰り返しになりますが、支配をする側と支配される側に世界が大きく分かれる状況ですが、支配というときには、正式なあるいは制度的な形で植民地や保護国になる場合もありますし、そうはならなくとも実質的に植民地に近いところが出てきたりします。たとえば中国などです。中国はかつてはこのような状況のなかで半植民地になったと言われました。植民地でないが、なかば植民地だというわけです。ある程度そのような性格があったと私は思うのですけれども、ただ、いま日本で中国史をやっている人と話すときに半植民地などと言う言葉を使うと、かなり怒られます。中国の主体性をもっとあつたのだというわけです。たしかにそれはそうなのですが、そこらへんは微妙なところですね。

しかも注意すべきは、このように一方で植民地を持つ国があり、他方で植民地化される国や地域があるという状況が、当時は特に批判するべき対象、非難すべき対象とは考えられなかったということです。つまり、植民地を持つということ、支配と被支配の関係があるということは、国際関係のなかにおいてはあたりまえという考え方や、感じ方が広がっていた時代であるわけです。少し難しい言葉で言えば「国際的な規範」、一つの基準になる価値意識ですが、それがこのような帝国世界的な構造というものを容認する、許容するという形になっていた時代だったわけです。

### (3) 帝国世界と日本

世界がこのような形になったというのは、非常に新しいことで、それまでの時期には見られなかったことです。そこで、私たちにとって一つ問題になるのは、日本の問題です。日本もこの帝国世界においては、支配する側に入ってきます。ただ、日本が開国をして明治維新になるというプロセスにおいて、日本がむしろ支配される側、植民地化されるような可能性があったのかということもいろいろと議論的にもなってきた、という点にも注意しておきたいと思います。さきほどベルギーがコンゴを国王の私有地にしたと言いましたが、そのベルギーの王様はレオポルド二世というのですが、どこかに自分たちの植民地を持ちたいということで、ではどこがいいかといろいろ考えて、日本も一つの候補にしたということも言われております。

帝国世界のなかで日本は、台湾、それから朝鮮、その前に南樺太ですけれども、そのようなところを植民地化して、このパワーポイントに示したように領土を広げていきました。日本が帝国世界のなかでこのように支配国になっていったということをどう考えるのかということが一つの問題になります。この点に関して、この講演会の第八回でザイフェルトさんというドイツの研究者の方が触れていらつしゃいます。一九九五年、丸山氏が亡くなる前年ですけれども、ザイフェルトさんが最後に丸山氏と会ったときに、その会話の多くが植民地支配に関する歴史認識をめぐってだったというのです。しかもそのときに丸山氏が、「一九〇五年までは、つまり日露戦争が終わるところまでの歴



日本植民地の拡大  
(マーク・ピーティー  
『植民地 帝国50年の興亡』)

史で、朝鮮へ影響を与えること、そして日本の支配圏に入れることは、その時代にはそれほどひどいことではなかった」ということを言われ

たというのです。これにはザイフェルトさんもびっくりしたというわけです。「私は今でも驚いています。しかし、考えてみますと、列強はみんなそうやりました。丸山先生の鋭いところだと思えますけれど、ひどくなりましたのはそれ以後です」と。このような見方は一つ特徴的です。つまり、日露戦争あたりで日本が変わっていくというわけです。そこからの植民地化と戦争に進んでいく道と、それ以前というものを対比して考えるわけです。丸山氏が一九四九年に書いた「明治国家の思想」でも、「明治の時代が持っていた健康さというものが、国際関係にも見られる」とされています。国際的な規範意識がどうしても弱かった、危うかったことは否定できないけれども、後の世界大戦の時代に比べるとかなり違うのだという議論です。

ザイフェルトさんのこの講演の記録を拝見して思い出したのが私の先生の議論です。江口朴郎さんという方です。江口氏が生まれたのは一九一一年で、丸山氏よりちょっと早いです。亡くなったのが八九年なので、これも丸山氏より少し早いのですけれども、八九年の江口氏の告別式ときに丸山氏から弔電が来たのを私は覚えています。『丸山眞男集』の別巻にその弔電が載っています。丸山氏とかなり付き合ひがあった方なのです。

この江口氏の議論に私は非常に影響を受けていて、私がさきほどから言っている帝国世界という議論、つまり世界体制として帝国主義を見ていくという議論は江口氏の議論から影響を受けているのですが、その江口氏も帝国世界のなかの日本について丸山氏とある意味で同じ

ようなことを言っていました。明治の政治家の指導的な役割は評価すべきで、それが民族的独立の可能性を実現した能力なのだ。しかしそれが日露戦争あたりの後になると、非常に反動的というか問題のある体制になってくるという議論です。

それからさらにまた連想されるのが、もっと一般的な影響力がある議論を展開した司馬遼太郎さんです。司馬さんの考え方はよく「明るい明治」と「暗い昭和」の対照と呼ばれることがありますけれども、まさにそれなのです。明治国家はリアリズムもあってよかったが、それが日露戦争の後、非常に問題のある体制になっていったのだという議論です。司馬氏は江口氏や丸山氏よりも少し後の世代、一九二〇年代の生まれになりますけれども、このような議論をどう考えるのかというのは、一つ問題になってくると思います。

### 三 帝国世界の変容期・第一次世界大戦と第二次世界大戦

#### (1) 第一次世界大戦(一九一四〜一八年)

次の時代です。第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての時代で、帝国世界の変容期と私は呼んでいます。つまり、いま申し上げたような、世界が支配する側と支配される側に大きく二つに分かれる構造が変わりはじめます。変わりはじめるとは、しかしそれが決定的に変わるわけではない。第一次世界大戦で少し変わりはじめるとは、しかし基本的な構造の変化ではないということ

となのです。

まず、第一次世界大戦です。簡単に言ってしまうえば、第一次世界大戦というのは、帝国世界を築き上げ、作ってきた支配する側の諸国が支配する領域の維持や拡大をめぐる戦った戦いであると言うことができます。それが世界大戦としての様相、世界に広がる戦争としての様相を呈したのも、帝国主義世界体制のもとで世界が結びついていたからなのです。ここに示したのは第一次世界大戦の図なのですが、この青い方が同盟国側といってドイツとかオーストリア、それからオスマン帝国ですね、そのような国々です。それからピンクと黄色が同盟国側に敵対する側です。黄色いところは遅れてそちらに参加した国です。アメリカ合衆国などは遅れて参加しました。このように世界に広がる大戦でした。

とはいっても、この第一次世界大戦で主な戦場になった地域はヨーロッパで、ヨーロッパを中心とする戦争でありました。これは、ヨーロッパのほかにアジアや太平洋でも戦争が激しく戦われた第二次世界大戦とは異なるところです。第一次世界大戦の際にもアジアや太平洋でも戦争が行われたことはたしかです。青島という、中国でドイツがそれまで支配していたところに日本が攻撃をしかけるということもありました。ただこれは、一九一四年の秋にすぐに決着がつかまりました。それほど大きな影響を日本に与えるわけはありません。それから、私がかかなり着目するのがアフリカでの戦争です。アフリカでドイツが持っていた領土でも戦闘があったのです。アフリカでも戦争が



第一次世界大戦 (dtv-Atlas Weltgeschichte)



あったことは、帝国世界のなかでのアフリカの位置を示すものであり  
ました。

さらに第一次世界大戦は、総力戦という性格を持つようになりまし  
た。総力戦というのは、まさに国の総力をあげなければ戦えないよう  
な戦争、つまりドンパチが行われている前線で戦争が行われるだけで  
はなく、それを支えるための物資の生産のため、経済的にも総力を  
尽くさなくてはならないし、人間も徴兵制をしくなどして総動員する  
という戦争です。ただ日本の場合には、第一次世界大戦では総力戦は経  
験していません。

帝国世界という議論との関係で私が強調したいのが、この総力戦に  
あたるような状況が、支配される地域においても見られたということ  
です。それを私は「帝国の総力戦」と呼んでいます。この「帝国の総  
力戦」というのは私が作った言葉なので、あまり流通している言葉で  
はありませんけれども、支配されている地域の物資や動員がまさに総  
力をあげて支配する側の戦争に動員されるという戦争です。言い換え  
ると、支配する側はそのような地域の物資や人員を動員しなければ戦  
えなかった戦争です。イギリスが支配していたインドが一番いい例  
で、一五〇万人以上の人がこの戦争に動員されて、そのうち一〇〇万  
人以上の人が遠く離れたヨーロッパに送られました。日本は、日本帝  
国がもうこのころにはできてきているわけですが、この戦争では「帝  
国の総力戦」は体験はしていません。

この戦争の結果ですけれども、「短い二〇世紀」の議論にみられるよ



パリを行進するインド兵 1916年  
(www.balirai.co.uk)

うに、ヨーロッパは大きく変化いたします。第一次世界大戦前までの  
時代のヨーロッパと、それ以降のヨーロッパは大きく変わったわけ  
です。しかし、帝国世界の支配される側においてはどうかだったのかとい  
うと、結局その前の時期にできていた支配と被支配の仕組みはこの戦  
争を経て変わります。この戦争を経て、大戦後、国際連盟という  
国際組織が作られます。それまでの世界にはない形の国際組織です。  
戦争をふたたび起こさないことを中心的な目的として作られた組織で  
すけれども、この国際連盟のもとに委任統治という仕組みが作られま

す。この委任統治というのは、この戦争で敗れた国、つまりドイツやオスマン帝国といった敗れた国が持っていた領土、植民地をとりあげて、国際連盟が戦争に勝った国々にその領土の統治を委任するという仕組みだったのです。新しい形をとりはしましたけれども、結局支配・被支配の関係はそこで続いていきました。ただ、直接的な植民地の再分配という形では行われず、国際連盟という仕組みを通したところはやはり新しいわけです。それだけそこに変化の芽が見られたとも考えられます。

この第一次世界大戦で国際関係がどう変化したかということについて、丸山氏は国際連盟ができたことをかなり評価されています。「政治権力が民族国家を超えて益々国際的に組織化されるようになりました」〔政治の世界〕一九五二年〕というのが典型的な議論です。

## (2) ロシア革命（一九一七年）

第一次世界大戦のなかで生じたのがロシア革命で、このロシア革命をどう世界現代史のなかに位置づけるかというのが、また非常に大きな問題です。ホブズボームの「短い二〇世紀」論は、彼が生まれた年に起こったロシア革命を決定的な意味を持ったものとして位置づけます。ただ、このロシア革命についての評価は近年、どんどん変化しています。かつては、ロシア革命はまさに世界を大きく変えた革命であるという議論が一般的でした。この会場に私に近い年齢の方もいらっしやるわけですが、私たちはそのような形で議論することが多かった

わけです。しかし冷戦の終結によって社会主義の勢力が大きく低下するなかで、ロシア革命の位置づけもかなり変わってきました。それまでも、一九三〇年代にスターリンがソ連を支配して大粛清を行ったことをめぐるスターリン批判は一九五六年以降非常に強くなってきましたが、その場合は、スターリンは批判するけれど、ロシア革命は違っていたという見方が一般的でした。ロシア革命からスターリン主義に変化したという考え方だったわけです。しかし冷戦後には、スターリンがやったことのもとを尋ねてみれば、ロシア革命に行き着くのではないかという議論が出てきます。そういった形でロシア革命に対する議論も変化してきました。

ただ、ここで私が注意したいと思うのは、帝国支配ということに着目すると、ロシア革命が持った意味として大きいのが、帝国世界で支配をされていた地域にそれが与えた影響だという点です。第一次世界大戦のあたりからそれぞれの地域の民族運動がだんだんと強まる傾向を見せて、それが植民地支配の仕組みの解体につながっていくわけですけれども、そのような変化のなかでロシア革命が持った意味は重要です。中国やイラン、トルコ、朝鮮などといったところの民族運動にロシア革命が与えた影響ですね。アフリカなどでも影響はありました。ただ、アフリカの場合は民族運動の展開がまだまだ遅れていたわけですが、そこに外からアフリカ系アメリカ人が持ち込んだパンアフリカニズム、つまりアフリカ全体として解放の方向をめざそうという動きに、ロシア革命は大きく影響を与えました。ロシア革命の位置づ

けとしては、そうした点を見る必要があるのです。

もう一つロシア革命に関して、帝国世界との関連で注目しておきたいのが、ロシア革命の結果できたソ連、ソビエト連邦という国の形です。これは社会主義体制の国家であったわけですが、別の見方から言うと、ロシア帝国の構造をうけついで国家でした。パワーポイントの左側の図がロシア帝国で、濃い緑のところはロシア帝国です。緑の薄いところは勢力圏と言っているところです。右側がソ連の領域です。ロシア帝国の領域とソ連の領域は、北欧のフィンランドは独立をしてソ連には入っていないのですけれども、それ以外のところでは重なっていることがお分かりになると思います。丸山氏も晩年に近いある座談会で、「ぼくは、ソ連はロシア帝国の遺産を継承しちゃったと思うんで。国内体制は別として、領土はそのままらっているわけでしょう」ということをおっしゃっています（丸山眞男先生を囲む会（下）「一九九三年、『丸山眞男手帖』四二二号）。まさにその通りなのです。ただ、ロシア革命に関する丸山氏自身の考えは、どうもなかなかはっきりとまとまっておかみにくいところがあります。ラスキというイギリスの政治学者のロシア革命論を検討した、戦後初期のかなり長い文章があるのですけれども（ラスキのロシア革命観とその推移」一九四九年）、そこでもご自身の判断は回避されている印象を私は持ちました。



ロシア帝国 (britannica.com)



ソ連 (quora.com)

### (3) ファシズム

第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての時期で次に重要な問題として、ファシズムという問題があります。ファシズムは言うまでもなく、丸山氏が正面に据えて戦争直後から一九五〇年代にかけて議論をされた問題です。特に日本ファシズムの問題を議論されました。ただ、このファシズムという問題も、世界現代史に関する最近の議論のなかではあまり問題にされなくなってきました。ファシズムの時代と言われた一九二〇年代から三〇年代にかけて、イタリアでムッソリーニの体制が、それからドイツでヒトラーの体制ができるわけですが、その時代のそれぞれの地域の問題についてはいろいろと詳しい研究が進んでいます。しかし、そのようなものを全体としてファシズムという概念でまとめて見るといふ姿勢がどうも最近はなくなっています。私はそれは問題だと思っています。日本に関して、丸山氏は「日本ファシズム」という言葉を使われて議論されたのですが、「日本ファシズム」という言葉も最近ほとんど聞かないと言ってよいでしょう。それにはそれなりの理由があるわけですが、第一次世界大戦後の、第二次世界大戦までの、あるいは第二次世界大戦も含んだの時期の世界史を議論する場合には、ファシズムという概念を使うことの意味合いは大いにあると思うのです。

ファシズムというものは、簡単に言ってしまうと、第一次世界大戦後の秩序を暴力的に変えようとした運動や体制だと思います。国内的にも対外的にもそのような動きをした国々について、ファシズムとい

う言葉で括るのは有効だろうと思うのです。レジユメでは丸山氏のファシズムに関する定義に類するものをあげておきました。

「例えば個人主義的自由主義的世界観を排するとか、或いは自由主義の政治的表現であるところの議会政治に反対するとか、  
由主主義の主張、軍備拡充や戦争に対する讚美的傾向、民族的  
対外膨張の主張、神話や国粹主義の強調、全体主義に基く階級闘争の排斥、特に  
マルクス主義に対する闘争というようなモメント」(「日本ファシズムの思想と運動」一九四八)

ここにあるような定義——自由主義的なものを排する、それから議会政治に反対する、さらに対外的な膨張の主張等々、このようなものを共通点としてこの時期の政治について考えることは重要だと思うのです。

さらに、私が帝国世界という議論との関係でここで強調したいのは、このようなファシズムという形で括ることができる国々——イタリア、ドイツ、さらには日本ですけれども——、こうした国々が、帝国世界が崩れようとしたはじめた第一次世界大戦後の動きに逆行する形で、積極的に新たな植民地、領土を獲得していかうとした国であったということ。積極的かつ暴力的な形で帝国世界の解体の方向を押しとどめたり、それに逆行しようとする動きをした国々です。こうした性格がファシズムと言われるものの一つの重要な側面なのです。

そのようなファシズムの諸国がいろいろな形で暴力をふるうわけですが、それは帝国世界のなかで見られた、植民地を獲得する過程や支

配を行っていく過程での暴力をうけついでいます。たとえば、ドイツのナチスが六〇〇万人というユダヤ人を虐殺したことはホロコーストと呼ばれますが、このような特定の集団をめざして大量虐殺をしているくジエノサイドという行為のさきがけとも言われるのが、帝国世界のなかでドイツがアフリカの植民地で行った虐殺行為です。ヘレロ人たちを虐殺したことで、二〇世紀の初めに起こりました。ファシズムについては、そのような系譜にも注意する必要があります。

#### (4) 第二次世界大戦（一九三九〜四五年）

次に第二次世界大戦はどのように見られるかということに移ります。第二次世界大戦の性格を論じるときには、いま言ったファシズムという概念を使わないと、なかなか説明をしにくいところがあります。ファシズム諸国それぞれに対抗する諸国との間の戦争だという——これを反ファシズム戦争と呼ぶことがあります——性格がやはり基本的なものです。ただここで注意すべきは、反ファシズム陣営の性格です。ファシズム諸国は、いま私が言いましたように非常に積極的かつ暴力的に新たな植民地支配を作っていく、領土を開拓していくこととしました。それに対して反ファシズムと言われた諸国が帝国世界との関係ではどうだったのかというと、これまた支配する側であったことに変わりはありません。ただし、ファシズム諸国のような形で積極的に新たな領土をひろげていくという動きをとったのではなく、現にあるものを守ろうとしたのです。あるいはファシズム諸国に奪われた領土

をまたとりかえそうとしたのです。しかし、支配国であることに変わりはありませんでした。したがって、第二次世界大戦は第一次世界大戦と似たような帝国主義戦争としての性格も持ったと言えることができます。

第二次世界大戦は第一次世界大戦と同じように、といえますかそれ以上に世界に広がる大戦としての性格を持っていて、今回はアジア太平洋も主戦場になっていきました。

それから、総力戦という点もまた同じです。この戦争では日本も総力戦体制をとるようになりました。総力戦体制で人々が動員されるなかで、学生は最初は省かれていたわけですが、学徒出陣という形で軍に動員されるようになります。いまやっているNHKの朝ドラのなかでもそれが出てきます。このところを丸山氏との関係で言うと、東京帝国大学の助教授になっていた丸山氏までも動員されたわけです。これは非常に例外的であって、荻部直さんの丸山眞男についての非常にすぐれた伝記的な書物では、おそらくは思想犯としての逮捕歴が警戒されたのであろうとされています（荻部直『丸山眞男 リベラリストの肖像』岩波新書、二〇〇六年）。

さらに、この大戦は第一次世界大戦と同じように「帝国の総力戦」になり、インドなどもやはりその対象になりました。ただ第一次世界大戦と違うのは、そのような「帝国の総力戦」のほころびが最初から出ていたことです。これはインドで非常にはっきりしました。インドの民族運動の中心的組織だった国民会議派は、インドの独立をイギリ

スが約束してくれないかぎりは戦争に協力しないという態度を貫くのです。これは第一次世界大戦では考えられなかった大きな変化です。

日本帝国もこの戦争においては「帝国の総力戦」になります。台湾や朝鮮の人々や物資が動員されることになったわけでは、一九四四年、召集を受けた丸山氏はその朝鮮の平壤に送られて、そこで兵隊生活を送りました。結局病気になるれてそれは短期で終わるわけですが、そこで朝鮮人兵士の憎しみの対象になったという経験もされました。

この戦争の結果として、第一次世界大戦のあたりから起こりはじめていた帝国世界の解体への本格的な動きが出てきます。それは戦争が終わった時点で非常にはつきりと出てきました。一九四五年八月一日に日本の降伏が公にされるわけですが、その直後にインドネシアの独立宣言、さらにはベトナムの独立宣言などが行われています。さらに四六年にはインドの独立に向けてのイギリスとの交渉が始まります。第二次世界大戦中、イギリスは戦争が終わったらインドに独立を与えることを約束せざるをえなくなっていたので、やむなく独立に向けての交渉が始まったのです。

以上が帝国世界の変容の時期ということになります。

#### 四 帝国世界の解体期…第二次世界大戦終結期…一九九〇年代初頭

##### (一) 冷戦

次に、帝国世界の解体期、第二次世界大戦の後の時期についてお話

しをいたします。第二次世界大戦後はよく冷戦の時代と言われます。たしかにそれはそうなのです。冷戦が非常に大きな意味をもって、日本も冷戦のなかにまきこまれたわけでは、冷戦というのはあらためて説明するまでもないと思うのですけれども、一方ではアメリカ合衆国、他方ではソ連を中心にする二つの陣営があつて、その間で競合関係、いろいろな形での対立があつたけれども、戦争にはならないという状態でした。一つにはイデオロギー的な対立、資本主義対社会主義という対立がみられ、それと同時にパワーポリティクス的な、権力政治的な対立、軍事的な対立がありました。これは核兵器の競争も含んでいたわけでは、

冷戦が終結して社会主義が駄目になってしまつて、冷戦のなかで社会主義というイデオロギーが持っていた力というものがえてして軽視されるようになったと思われまふ。冷戦におけるイデオロギー的な対立要因がどうもうしろの方に押しやられてしまつていく傾向があるのです。しかし、イデオロギー対立もやはり重要で、この二つの側面は両方きちんとおさえておく必要があるだろうと思ひます。レジユメには丸山氏の表現をあげておきました。これは「三たび平和について」といふ、日本がサンフランシスコ講和に臨むときに出された、講和の形を批判する有名な宣言の一部です。その宣言の最初の部分の草案を丸山氏が書かれた、その部分なのです。イデオロギーの対立と、丸山氏の表現で言えば組織化された武装権力としての現実の国家の対立——これがさきほど言つた二つの対立になります——が重要だと指摘

されています。「三たび平和について」は、この二つの世界の並存を實現し、それを高度化していくことは可能なのだということを、議論の中心にしています。

冷戦は確かに重要なのですが、世界現代史、第二次世界大戦後の世界史を考えた場合に、冷戦を中心として議論することではないのかという点は問題になります。普通は冷戦の時代と言われますが、では冷戦に直接まきこまれていた人々は世界中でどれだけの点かという点を考えてみる必要があるのです。多くの地域、多くの人々が冷戦にまきこまれていたことはたしかです。しかしアフリカをとってみれば、あるいはインドでもある時期まではそうなのですけれども、冷戦にはあまり関係しませんでした。冷戦を問題にするよりも、それまでの支配されてきた位置から脱却して、自分たちが自立をしていくことの方がこそ一番重要な問題なのだと感じていた人々の方が、むしろ多かつたのではないかと思われるのです。つまり、帝国世界において支配される側に立っていた人々にとって、最大の問題だったのは支配される位置からの脱却——これを脱植民地化の課題と言いますが——ではなかつたかと思えます。

脱植民地化を推進したのは支配されていた地域におけるナショナリズムであつたわけです。さきほど引きました一九五〇年の「三たび平和について」のなかで丸山氏も、「植民地・半植民地地域での帝国主義対ナショナリズムの対立もますます深刻である。例えば東亜の情勢において主潮をなしているのは、「冷戦下の対立よりも」むしろこの後者

の対立であるように見える」と、まさにそのような認識を示されています。

## (2) 脱植民地化

それではその脱植民地化とはどのようなものだったのでしようか。これもいろいろな中身を含みます。しかし一番はつきり見えて重要なのは政治的な独立です。それまで支配されて国際社会のなかで主体としてふるまえない地位に置かれていた国や地域が主権を取り戻す、獲得する。これを狭い意味での脱植民地化と私は呼びます。政治的な独立なのです。ただ、それで問題が解決するわけではなく、政治的に独立しても、獲得した主権にいろいろと限界があつたりしますし、さらには経済的に、あるいは文化的にまだまだ独立、自立ができないという状況が存在したわけです。経済的独立や文化的独立という課題は長い間残つたわけです。しかし、だからといって政治的独立の意味が小さくなるかというところではありません。政治的独立が達成されてはじめて、その次の課題も出てくることになるのです。

その意味で政治的な独立を私は重視しますが、その狭い意味での脱植民地化の過程もいろいろあります。平和なうちに、交渉によって植民地が独立する場合もあるのですけれども、それはむしろ例外的で、多くの場合にはいろいろな暴力行為があつて、多くの犠牲が出た末に独立が実現します。インドの場合、イギリスとインドが交渉して独立をしたという形なのですけれども、それによってインドとパキスタン

という二つの国ができたことで問題が生じました。インドとパキスタンの国境線が非常にいい加減な形で引かれた結果、人々が右往左往して、大変な犠牲が出ることになったのです。それも、脱植民地化のプロセスで生じた犠牲なのです。そのようなものも含めると、本当に多くの犠牲が出たことはたしかです。

脱植民地化を軸にして第二次世界大戦後の時代を見る必要があると思うのですが、そうすると、たとえば朝鮮戦争やベトナム戦争という戦争をどう位置づけるかという問題も出てきます。冷戦ということにもつばら着目すると、冷戦は冷たい戦争で、ヨーロッパでは熱い戦争はなかったのだけれど、アジアを見ると朝鮮戦争やベトナム戦争があり、これは熱い戦争だったのだと言われます。それはたしかなのです。しかし、朝鮮戦争やベトナム戦争の基本的な性格を考えるにあたっては、まず脱植民地化というプロセスのなかに位置づけることが重要です。つまり、朝鮮が植民地であったところから解放されて、ではその次にどのような国を作るかという模索のなかで、内戦が起こったわけです。それに冷戦が重なっていったと見ることができません。ベトナム戦争の場合も同じことです。つまり、脱植民地化後の国の形をめぐる戦争に冷戦が絡まっていたわけのです。

そのように脱植民地化を軸として見ると、それでは日本はそこどう見られるでしょうか。日本は帝国を持っていたわけですから、その帝国は戦争に日本が敗れたことで突如なくなりました。八月一日は、日本にとっては敗戦記念日ですけども、日本の植民地、朝鮮

などでは解放の日だということになります。解放という言葉が使われたりするわけです。帝国が解体するという事態が敗戦によって突然起こったがために、その意味合いといったものに日本という国は結局向き合わないままになりました。そうした状態のまま、ずるずると戦後が進んでいったと考える必要があります。

ところが日本の周囲のアジアにおいては、脱植民地化を主導したナショナリズムが非常に強力に見られていました。丸山氏はこのアジアのナショナリズムを非常に重視されました。「三たび平和について」においてもそれを強調されています。それから「現代文明と政治の動向」という一九五三年の文章があります。これは丸山氏がわりあいまとまった形で国際政治について論じたものだと思うのですが、そこでは、現代政治の基本的な動向が、一つはテクノロジーの飛躍的な発達、二番目として大衆の勃興、三番目としてアジアの覚醒、という形で整理されています。アジアの覚醒が現代世界を基本的に動かしている力として重視されていることに注意したいと思います。

### (3) 「長い二〇世紀」の終わりへ

さて、このように冷戦と脱植民地化が重なり合い交錯するなかで「長い二〇世紀」は終わりを迎えることとなります。冷戦自体も一九七〇年代からいろいろと曲折を経て、一九八〇年代末から九〇年代初めにかけてソ連や東欧圏が大きく変化し、終焉に向かっていきましました。

その時期を、帝国世界、「長い二〇世紀」の終焉という視点から見れば



ばどうなるかという、さきほどから言っている狭義の脱植民地化のある意味での「仕上げ」の時期であったと思われる。狭義の脱植民地化が集中的に進むのは一九六〇年代です。一九七〇年代になると、それからちよつと遅れる形でアフリカでのポルトガルの植民地の独立などが進みました。それから一九八〇年になるとジンバブウェー—アフリカの南の方の、かつては南ローデシアと言われていた地域——が、白人が中心となつての「一方的な独立」宣言の後の激しい内戦を経て、アフリカ人が主体となる形で独立します。また一九九一年には南アフリカでアパルトヘイトという人種差別、人種隔離の制度が廃止されました。このような人種差別は帝国世界での支配と被支配の構造の一番底にあった要素で、それが目に見える形で一つの区切りを迎えたことの意味は大きかったと思われまゝ。さらに、ロシア帝国の構造をひきついでいたソ連も解体していくことになるわけです。ソ連の解体は冷戦の終焉を示すとともに、脱植民地化の「仕上げ」の一環だと言えるのです。

冷戦が終わつた後しばらくして、丸山氏は亡くなられるわけですが、冷戦が終わつた後しばらくして、丸山氏は亡くなられるわけですが、それでも、その間の丸山氏の議論で非常に私が面白いと思つたものがあります。これはむしろ社会主義の問題、「短い二〇世紀」の議論の方につながるところですけれども、亡くなる前年に、「いよいよ本当の社会主義を擁護する時代」というものが来ているのだと話されているのです。「ボルシェヴィキだけが社会主義じゃないし、第一、ある時期以後のソ連型社会主義はむしろ国家主義の変種というべき」（「夜店と本店

と——丸山眞男氏に聞く」一九九五『丸山眞男座談 9』）だつたと言われています。社会主義がとにかく地に落ちたと言われているなかで、社会主義の新たな意味を見出そうとする姿勢をとられていたわけで、もつと丸山氏が生きておられれば、こうした議論をさらに展開されたのだらうと思ひますので、それは残念です。

## 五 私たちの生きる時代

### (一) グローバル化の進展

さて、むずびに入らせていただきます。私たちが生きている時代はそれではどうなのか、「長い二〇世紀」が終わつたとして今の世界はどうなっているのか、ということが問題です。非常に陳腐な表現になつてしまふのですが、私は「長い二〇世紀」が終わつた後の時期というのは、グローバル化が進展する時代だと思ひます。グローバル化というのは、国境をこえる形で、ヒトやモノ、おカネ、さらには情報というものが動いていく状態です。

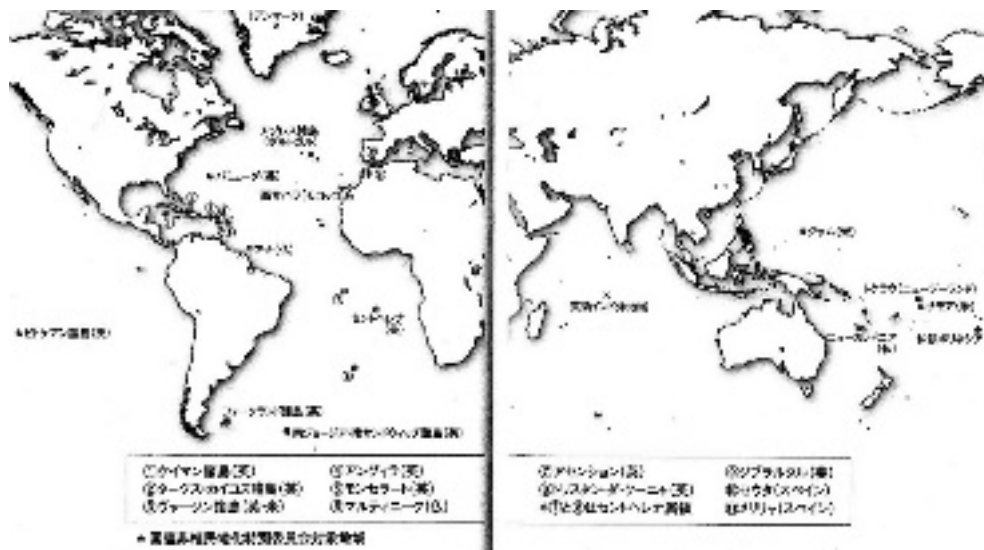
一九九〇年頃に「長い二〇世紀」的状况が終わると、その後、人々の間の格差や差別というものがだんだんとなくなつて、人々が共に生きる共生という方向に世界は向いて行くのではないかと、私もかなり楽観的に考えていた時期があります。ただ、そうはならかつたことはたしかです。実際にいろいろな形での問題が噴出してきています。経済格差もそうですし、内戦や、最近特に出てきている難民の問題があ

ります。さらには昨年以降のコロナ禍という形での、予測もしなかった変化も出てきています。とはいえ、それによってグローバル化の動きが止まるとは私は思いません。現在、たしかにヒトの動きは止まっています。ただ、これもいつまでも続くものではないと私は思いますし、他のさまざまなもの、とりわけ情報の流通はますます盛んになっているわけです。

## (2) グローバル化の下の世界の様相

グローバル化の下の世界というのは同時に、帝国世界で被支配圏だった諸地域も主権国家になった後の、主権国家で覆われている世界です。グローバル化を構成しているのはそのような国家で、今や公式な形で支配されている地域は非常に少ない。地図で示しているのは残存する海外領土ですが、海のなかにポツポツとある島がそれです。最初に示した帝国世界の地図とはまったく違う地図の形になっているわけで、世界のほとんどの部分は、独立をした国家、主権国家というものによって覆われています。

ただ、こうした主権国家というものがどのような将来を持つのか、これから先どのような役割を果たすのかということ、非常に大きな問題になってきます。この辺のところについても、冷戦が終わって以降、いろいろな形で議論がされてきました。丸山氏の議論をとってみても、これは冷戦が終わる直前ですけれども、『文明論之概略』を読む」のなかで、ワン・ワールドとワン・ワールド・オーダー、一つ



脱植民地化後の残存海外領土 (木畑『二〇世紀の歴史』)

の世界と一つの世界秩序の形成を模索する方向について語っていらっ  
しゃいます。それから、国家とは違う主体というものに着目するよう  
な発言もされております。

私自身は、これからの世界でも主権国家の役割はいろいろな形で残  
るだろうと思いますが、それ以外のいろいろな主体の役割がさらに大  
きくなるのはたしかですし、国家の役割も見直されていくことは事実  
であろうと思います。いまのコロナ禍のなかでは、どちらかという  
とグローバル化が何となく後景に退いて、国家の役割が前面に出てい  
るような感じもしないわけではありません。ただその反面、それではだ  
めだという認識も出てきています。オミクロンなどといった新しいコ  
ロナウイルスが出てくると、それに対して国家という単位で反応して  
いてよいのかという問題が非常に深刻な形で出てきます。ちょうど昨  
年コロナ禍がはじまってしばらくたった時ですが、前にイギリスの首  
相をやっていたゴードン・ブラウンという人が、コロナ禍のなかでま  
すますグローバルな政府が必要だということが分かってきたというこ  
とを言ったことがあります。こうした見方については、当然いろいろ  
な点を詰めて考えてみなければなりません、今のコロナ禍が示して  
いるものは、やはりそのような展望だろうと思うのです。

### (3) 帝国世界は終わったのか？

最後に、私が今日お話ししてきた帝国世界というのが変わったの  
かという問題に触れておきます。私が今日の議論の前提になっている

『二〇世紀の歴史』という本を出したときに、たくさんの方が批判を  
してくださいました。かなりいろいろな方から指摘をされたのが、木  
畑は一九九〇年代初めで「長い二〇世紀」が終わり、それによって帝  
国主義の時代以降帝国世界が孕んでいた問題が何か一区切りついたよ  
うな議論をしているが、とてもそのようなものではなく、その後さま  
まだまだ同じような問題が続いているのではないかということです。そ  
れはその通りなのです。同じような問題が続いていることはたしかで  
す。狭義の脱植民地化にかかわるところで言えば、それに逆行するよ  
うな動き、たとえばロシアのクリミア併合のようなものも出てしまし  
た。またアメリカのアフガニスタンに対する攻撃やイラク戦争など  
は、まさに帝国主義の時代における戦争を想起させるものでした。「対  
テロ戦争」ということが言われてきましたけれども、「対テロ戦争」を  
行う自分たちは正式の国家、正式の軍隊であり、対する相手の側はテ  
ロ組織で、ある種のならず者なので、それをやっつけるのだという議  
論が、そこではなされます。テロ勢力といわれる側にとこのような考え  
どのような論理があるのかというようなことは、そこでは問われない  
わけですが、そうした構図は、帝国世界の時期にあつた植民地に対す  
る戦争の場合とよく似ているのです。これは当時 small wars、「小さ  
な戦争」などと呼ばれました。そうした戦争は、支配しようとする側  
から見れば遠く離れたところの「小さな戦争」で、そこでの相手は全  
然知性もない、ならず者集団だとみなされたのです。「対テロ戦争」を  
見る際、私などはそうした戦争を思い起こしたりもするわけです。こ

うした問題が残っていることはたしかです。

ただし、人間というものは歴史から学ぶことができると思います。私が言う「長い二〇世紀」というものを経てきたわれわれがいまどのような世界を作っているのか、これからどのような世界を作ろうとするのかというときに、同じような問題を繰り返すのはそれだけより罪深いことだと、感じるわけです。それが私の現状に対する認識ということになります。

非常に駆け足でいろいろと端折るところも多かったので、お聞き苦しかったかと思いますが、私の話はこれぐらいにいたします。ご清聴ありがとうございました。

21<sup>th</sup>  
丸山眞男文庫  
記念講演会

要申込・入場無料

# 世界現代史への視座

丸山眞男が生きた時代を中心に

木畑 洋一 氏

2021. **12. 11. Sat.**

(東京大学・成城大学名誉教授)

15:00～16:30

東京女子大学24号館2階

**24202**教室

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1 ☎ 03-5382-6817 ✉ marubun@lab.twcu.ac.jp

🌐 <https://www.twcu.ac.jp/main/research/maruyama-center/index.html>

🐦 <https://twitter.com/maruyamabunko>

\*事務取扱時間:月・水・金曜日(10:30~16:30)

## 講師より

丸山眞男は、第一次世界大戦が勃発した1914年に誕生し、冷戦が終わりを迎えた数年後の1996年に逝去した。丸山が生きたこの時代は、イギリスの歴史家E.J.ホブズボームが、「短い20世紀」と呼んだ時代とほぼ重なりあう。私は、第一次世界大戦で世紀を区切るこの見方をヨーロッパ中心主義的であるとして、世界が支配圏と被支配圏に大きく分かれる状況に着目しつつ、1870年代(ヨーロッパ列強による植民地支配が広がり始める時期)から1990年代初め(被支配圏の政治的な自立、独立がひとまず一段落する時期)までを「長い20世紀」として捉える世界史像を提示してみたことがある。本講演では、この「長い20世紀」像に立脚しつつ、丸山が生きた時代の問題を中心に、世界現代史の捉え方を論じてみたい。その際、より広く世界史における近代というものをどう考えるかという点や、コロナ禍で揺れる現在の状況を歴史的にどう位置づけるかという点にも留意したい。またそれらとの関連で、来年から高校で始まる世界史と日本史を統合した「歴史総合」という新科目での歴史像の問題点にも触れる予定である。

## 講師プロフィール

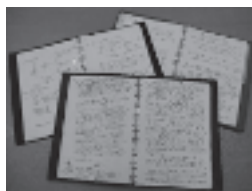
1946年生まれ。1970年東京大学教養学部卒業。東京大学・成城大学名誉教授。イギリス帝国史、国際関係史、国際関係論専攻。著書に『帝国のたそがれ：冷戦下のイギリスとアジア』(東京大学出版会、1996年、大平正芳記念賞受賞)、『第二次世界大戦：現代世界への転換点』(吉川弘文館、2001年)、『イギリス帝国と帝国主義：比較と関係の視座』(有志舎、2008年)、『二〇世紀の歴史』(岩波新書、2014年)など。

**お申し込み方法** 表面記載の連絡先にメールまたは郵便で、**お名前・ご住所・お電話番号**を明記の上、お申し込みください(先着100名)。**締め切り 12月7日(火) 必着**

## ご参加に際してのお願い

- ・ご来場前に検温を行ってください。発熱(37.5℃以上)または咳などの風邪症状が見られる場合にはご参加いただけません。また、ご来場中に少しでも体調に不安を感じた場合は直ちに帰宅ください。
- ・当日は正門よりキャンパスに入構してください。入構の際にお名前を確認いたします。
- ・入構後は会場までの範囲以外には立ち入らないようにしてください。
- ・構内・会場内ではマスクの着用、身体的距離(1~2m)の確保、消毒・手洗いの励行をお願い申し上げます。喫食はご遠慮ください。水分補給は差し支えございません。
- ・会場内は換気を行いますので、室温が低くなる可能性があります。

## 丸山眞男文庫



丸山自筆の講義ノート  
(丸山文庫所蔵)

20世紀の日本が生んだ世界的な政治学者・思想家、丸山眞男(1914-1996)の思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が、1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、国際的な丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

2012年4月より2017年3月まで、研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養 —丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を実施。2015年には、丸山宅での蔵書状況をウェブ上に再現した「丸山眞男文庫バーチャル書庫」(<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko>)、丸山のノート・草稿類のウェブ閲覧を可能にした「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」(<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives>)を公開しました。

## ACCESS

- JR西荻窪駅北口より徒歩約12分
- 西荻窪駅北口または吉祥寺駅行きバス吉祥寺駅北口より西荻窪駅行バス「東京女子大前」下車